

昨年休刊「カムイミンタラ」ウェブ版を創刊

門脇 啓二

文化、産業20年の特集再び

カムイミンタラは一九八四年三月から奇数月に隔月発行され、昨年一月の第百二十号で休刊となった「北海道の風土・文化誌」です。八ページにわたる特集を柱に二、三人のエッセー、それに随筆記事をプラスするというスタイルが二十年続きました。そのカムイミンタラがインターネット上でカムイミンタラ・net (http://kamimintara.net) として復活しました。すでに二十年間の特集やエッセーが収録され、二十日には新しいウェブ版カムイミンタラ第一号が公開されました。

カムイミンタラは一九八四年三月から奇数月に隔月発行され、昨年一月の第百二十号で休刊となった「北海道の風土・文化誌」です。八ページにわたる特集を柱に二、三人のエッセー、それに随筆記事をプラスするというスタイルが二十年続きました。そのカムイミンタラがインターネット上でカムイミンタラ・net (http://kamimintara.net) として復活しました。すでに二十年間の特集やエッセーが収録され、二十日には新しいウェブ版カムイミンタラ第一号が公開されました。

ウエーを運営する会社だったためでした。しかし第二号以降、特集で取り上げたのは道内各地で活躍する団体、ユニークな施設など多岐にわたり、りんゆう観光の業務とは切り離され、独自にテーマを追い続けました。たとえ第二号では「レンガ・その魅力を語る」として専門家に語っていただき、第三号では富良野の東大演習林の「どろ亀さん」で親しまれた高橋延清さん、第四号では江差追分取材しています。

「苦小牧・アオサギの森」「礼文の花」「釧路温泉」といった自然もの、「北海道開拓記念館」「もったいない博物館」「しよさんべつ天文台」「神田日勝記念館」といった施設紹介もの、といった企業もの、「中札内・人づくり、土づくり」「猿払村のホタテ漁業」「マイペース酪農交流会」といった二次産業もの、そして「戦後世代と戦争責任」「札幌市民オンブズマン」「クルマ社会を問い直す会」といった社会ものと特集はあらゆる分野に及びました。

私は二〇〇一年から特集を担当しています。札幌の「シアターキーン」を取り上げた「ある映画館の軌跡」、有珠山噴火を地元企業の経営面からとらえた「地域経済を支えよう 有珠山噴火に直面して」、北海道大学のある方々、地道に生きる人々などに登場していたきました。昨年一月カムイミンタラの百二十号が発行されて休刊となった。

カムイミンタラは四百年の原稿用紙換算で二十、三十枚になり、総合月刊誌の特集記事に相当するボリュームです。それが毎年六本ずつ二十年にわたって積み重ねられてきたのです。カムイミンタラのもう一つの柱は各界の人々に依頼したエッセー集「ずいそう」です。特集同様、そのジャンルは問いません。二十一年間で書いていただいた人々はおおよそ三百五十人にも及び、そのときどきに話題性のある方々、地道に生きる人々などに登場していたきました。

すでにインターネットのサイトではさまざまな出版物のコンテンツ（内容）が公開され、気軽に見ることができるようになっています。ただ紙に印刷した出版物に比べ、いまひとつしっくりこない感覚を多くの人が経験しているのではないのでしょうか。作家の東さんはそのあたりを、活字を読むという行為のどこかを耕しているのではないかと、と指摘しています。その点で電子画面から入ってくる文字情報はまだまだ頭を耕すまでには至っていないのかもしれない。

印刷業の大谷さんは、いま話題のオンデマンド（注文対応）印刷があと数年もすれば普通になるだろうと予想しています。カムイミンタラもバックナンバーの幾つかを選んで印刷・製本することが可能となるでしょう。今回の特集テーマは、新たにスタートするウェブ版カムイミンタラが抱える課題と将来の可能性そのものだったのです。（かわむき・けいじフリーライター カムイミンタラ編集室スタッフ）

三月一日に第一号が発行されました。前年に横路孝弘知事が誕生し、一村一品運動が起った時期で、同じ日には「おい北海道」キャンペーンも始まっています。いわゆる「まちおこし」の黎明期です。カムイミンタラも「みなさまの心をむすぶ北海道の風土・文化誌」というサブタイトルを掲げました。

「時代とわたし 三浦綾子」「アイヌ語を守る 平取町二風谷」「市民創作 函館野外劇」などの文化・芸術もの、「不凍給水栓」「札幌のシステムハウス」

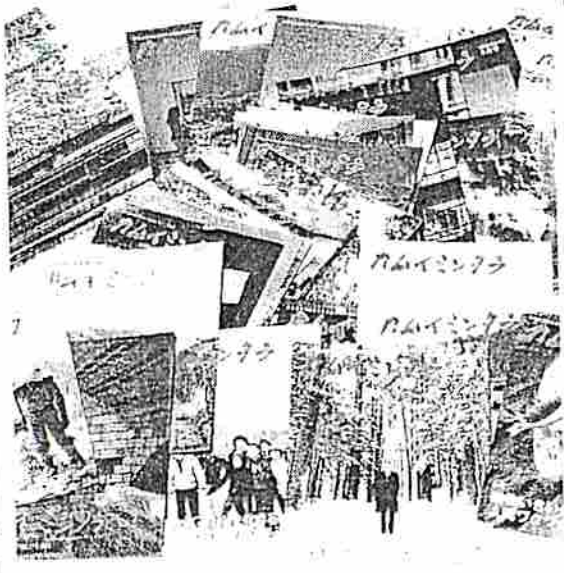
旭川市旭山動物園、戦前戦中のダム建設で犠牲になった人々の遺骨を若者たちが掘り起こした幌加内町朱鞠内での「東アジア共同ワークショップ」など、

たあと、始まったのが特集とエッセーのデータベース化でした。そして順次インターネットで公開し、百二十号がすべて出そろったのが昨年十二月一日です。

従来のカムイミンタラは表紙を含めた十六ページの冊子でした。一部二百円の値段がついており、全国の書店で販売されているほか、一部の書店で販売されてきました。しかし読者の広がりに限りがあり、発行部数はおおむね四、五千部にとどまっていた。

また百二十号分を合わせれば単行本十冊ほどのボリュームであり、小冊子という形態ではバックナンバーを探し出して読むのは簡単ではありませんでした。

20年の歴史を刻んだ「カムイミンタラ」



20年の歴史を刻んだ「カムイミンタラ」

20年の歴史を刻んだ「カムイミンタラ」

各界350人のエッセーも掲載

た。ウェブサイトへの収納で閲覧はるかに便利となったのです。

二十日に公開されたウェブ版カムイミンタラ第一号の最初のテーマとなったのが「出版とIT 今後の課題と可能性を探る」です。

作家の東直己さん、出版社の土肥寿郎さん、印刷業の大谷勝明さん、そしてITの専門家として北大大学教授の青木由直さんからそれぞれお話をいただきました。

すでにインターネットのサイトではさまざまな出版物のコンテンツ（内容）が公開され、気軽に見ることができるようになっています。ただ紙に印刷した出版物に比べ、いまひとつしっくりこない感覚を多くの人が経験しているのではないのでしょうか。作家の東さんはそのあたりを、活字を読むという行為のどこかを耕しているのではないかと、と指摘しています。その点で電子画面から入ってくる文字情報はまだまだ頭を耕すまでには至っていないのかもしれない。

印刷業の大谷さんは、いま話題のオンデマンド（注文対応）印刷があと数年もすれば普通になるだろうと予想しています。カムイミンタラもバックナンバーの幾つかを選んで印刷・製本することが可能となるでしょう。今回の特集テーマは、新たにスタートするウェブ版カムイミンタラが抱える課題と将来の可能性そのものだったのです。（かわむき・けいじフリーライター カムイミンタラ編集室スタッフ）

また百二十号分を合わせれば単行本十冊ほどのボリュームであり、小冊子という形態ではバックナンバーを探し出して読むのは簡単ではありませんでした。

20年の歴史を刻んだ「カムイミンタラ」